

column

災害から命を守る考え方「避難行動から生存行動へ」



11月5日は世界津波の日である。2015年の国連総会において毎年11月5日を「世界津波の日」と制定し、世界中で津波防災に関する新たな取り組みがはじまった。安政元年（1854年）11月5日、安政南海地震による津波が和歌山県を襲った際、濱口梧陵という村人が稲むらに火をつけ、津波から逃げ遅れた住人を高台へ導き、多くの命を救った逸話「稲むらの火」にちなんでいる。

さて、沖縄に目を向けると、4月3日午前9時01分気象庁は、沖縄地方に東日本大震災以来13年ぶりとなる津波警報を発表した。津波警報を受け多くの県民が避難した。幸い大きな津波は来なかったが、車避難による大渋滞が各地で発生し、車社会沖縄に大きな課題を突き付けた。

地震津波災害は数十年、数百年の間隔で発生している。私たちが住む沖縄は二つのプレートがぶつかり合う場所にあり、過去には大津波で1万人以上の島民が犠牲になった歴史もある。いつの日か来るであろう地震津波災害から命を守るための知識とスキルについて論じてみたい。

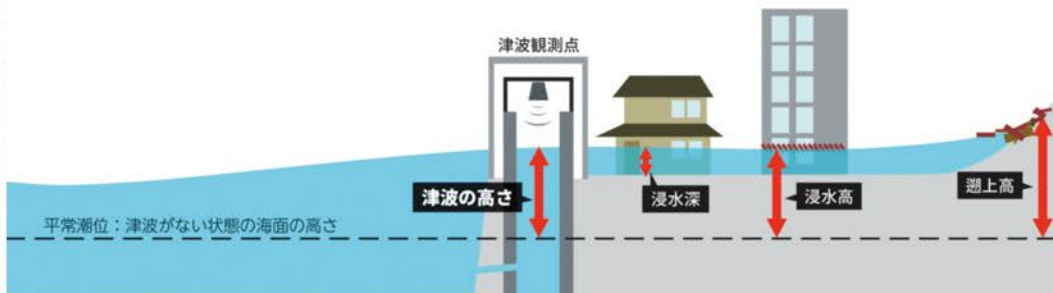
■津波の特性を知る

津波災害から命を守るためには、津波を知る必要がある。「津波の高さ」と「浸水深」「浸水高」「遡上高」がある。

「上高」がある。（図参照）

「津波の高さ」とは、津波がない場合の潮位から、津波によって海面が上昇したその高さの差を言う。気象庁が津波情報で発表している「予想される津波の高さ」は、この数値を基本に予想される海岸線の高さである。発表された津波の高さで、ここは大丈夫と安心してはいけない。場所によっては予想より高い波が押し寄せることがあるので注意が必要である。「浸水深」「浸水高」「遡上高」は、津波が引いた後の痕跡から推定される高さである。

津波は海岸付近の地形に大きく影響を受ける。特に岬や湾奥では津波は



高くなりやすく、海岸付近の数倍にもなることがある。東日本大震災では8mの津波の高さが、浸水高は16mにまで高くなった調査結果も出ている。「遡上高」は津波の高さの2倍〜4倍の高さまで達することから、津波の高さ5mであれば最大20mまで遡上する。

また、津波の速度は、水深に比例し、浅瀬になると速度は遅くなる。旅客機並みの速度で陸上に向かい、海岸近くでは時速36km（100m10秒の速さ）で上陸してくる。

■車避難の大渋滞

4月3日の津波警報解除後、元釜石市防災課長の佐々木守氏から「東日本大震災でも車避難による大渋滞が発生し多数の住民が犠牲になった。これは早急に解決する必要がある」と連絡があった。

沖縄県は全国唯一鉄道がなく、自動車保有数も120万台を超える。高台が少ない埋立地で市街地を構成する地域も多く存在する。難しい問題であり解決策を見出すことは容易ではないが、私の見解として、これまでの経験と見識から記述する。

車避難の当事者へのインタビューで得た内容から課題を抽出してみた。

津波警報で渋滞が発生した理由

- ① 津波避難は「原則徒歩」を理解していない。
- ② 垂直避難（頑丈な3階以上ビル）の理解不足。
- ③ 3階建のビルでは不安、もっと高いところを目指す。

④ 自分の愛車を守りたい。

以上の理由から全ての車所有者の防災知識の向上と意識改革が必要だと考えられる。交通安全運動のように県民全体を挙げて取り組んでいくことが急務である。

私たちは東日本大震災の津波映像を目の当たりにしたことで、津波避難は常に高さを求めている。時間的余裕があれば高台避難は賢明だが、短時間での津波到達の場合は近くの頑丈な3階建以上のビルへの避難も命を守る行動である。また、能登半島地震では建物倒壊や道路決壊で避難路が塞がれた事例がある。避難路は複数想定し、状況に応じて選択していくことも重要だ。

『津波から命を守るには

逃げるしかありません』

これは2011年沖縄気象台が作成したリーフレットの標語である。これこそが津波避難の結論だと思っている。危機管理の原則は「情報」と「想像」と「行動」である。最も重要な情報は、津波到達予想時刻と津波の高さである。震源地によって津波到達予想時刻は大きく変わってくる。南海トラフ地震では名護市に74分、沖縄近海の地震だと10数分で到

達すると予想されている。特に短時間での津波到達は危険であり、判断を誤れば命に関わることになる。家族防災会議で逃げ方や避難場所、真夜中に発生した時の対応など話し合うことが大切だ。また、海に近い学校や子ども園などは強い揺れや長い時間ゆっくりとした揺れを感じたら津波警報を待たず直ちに避難を開始する必要がある。

大切なことは津波警報発表で、全ての県民が避難することであり、避難することが当たり前前の沖縄にすることだ。生きるために逃げる「避難行動から生存行動」の考え方が肝要だ。

日本の防災は、一刻も早く警報を住民に知らせることを重点に取り組んできた。現在では防災無線、テレビ、ラジオ、エリアメール等の複数手段を同時に活用し発信している。

これまで幾度となく被災地を訪れ震災対応の聞き取り調査を実施してきた。生死の境目は情報を受け取る側の行動が大きく影響している。「自然災害を舐めていた」「これまで来なかったから今度も来ないと思った」と反省の弁が多数を占めていた。

釜石市唐丹町に震災の津波記憶石が建立され、上野栗璃さん（中学2年生）のメッセージ「100回逃げて、100回来なくても、101回目も必ず逃げて」が刻まれている。甚大な被害と犠牲から生まれた貴重な教訓である。私たちはこの教訓を心に刻み次世代へ継承していく責任がある。

自然災害は人間の都合など関係なく突然、容赦なく襲ってくる。近年の荒ぶる自然と共存するために自然を侮ることなく、今一度「人が死なない防災」

の実現のため、防災意識と知識を高め物心共に備えていくことが重要だ。

プロフィール

かかず あつし
賀数 淳氏

沖縄大学地域研究所 特別研究員
地域防災マネージャー（内閣府認定）
日本災害情報学会 会員
元糸満市消防本部 消防長

内閣府主催の「防災スペシャリスト養成研修」を修了、自治体職員では全国12人目の「地域防災マネージャー」に認定される。現在は「人が死なない防災」をメインテーマに学校や企業における防災教育、講演、調査活動を行う。東日本大震災等の被災地を訪ね行政職員、教員、保育士、消防団員、民生委員など様々な種類の震災体験者の聞き取り調査を行い、その反省や事実を「命を守る教訓」として県民に伝える活動を行っている。また、能登半島地震被災地には災害ボランティアとして参加し支援活動を継続している。

